

菅谷館跡絵図の再検討

—『城築規範』掲載絵図の分析から—

堀口智彦

はじめに

菅谷館跡を描いた絵図のうち、現在確認されている最も古いものは、寛文12年(1672)に刊行された『城築規範』に掲載されているものである。これをはじめとして、江戸時代以降いくつかの絵図や図面の存在が確認されており、それらは小野義信によって既に紹介されている(小野1984)。小野は、『城築規範』掲載の菅谷城絵図について「「折」や「出柵形土塁」などを明瞭に表現しており、明らかに軍学者が現地調査を行い作図したものと考えられる」と評価し、『城築規範』掲載の菅谷城絵図は、他の江戸時代の菅谷城絵図の元図になっていると指摘した。また、加藤光男も、『諸国古城之図』など『城築規範』よりも後に刊行された城絵図について、「これらは『城築規範』を参照し作成した絵図、つまり実際に現地を調査して作成されたものではない」と推察する(加藤2021)。

このことから、『城築規範』に掲載された絵図を分析して、現状との相違点を洗い出すことで、現在残る菅谷館跡の遺構について考える手がかりが得られるのではないかと考えた。もちろん、江戸時代の絵図は現在作成される測量図の精度には遠く及ばず、その正確性には留意する必要があるが、絵図に記された情報から、当時の城郭の研究において重視されたポイントや、表現の特徴についても考察していきたい。

1. 『城築規範』について

(1) 概要

『城築規範』には、戦国時代を中心に、南北朝期に伝承を持つものから江戸時代初期のものまで、全国に存在する72の城郭の絵図が収められている。江戸時代に作成された城郭の絵図集としては、先に触れた広島藩の浅野家によって編纂された『諸国古城之図』、高松藩の深井彪が編纂した『諸国廢城考』など著名なものがいくつか挙げられるが、それらの中でも刊行が最も早く、後に作成された城郭の絵図集にも同系統の絵図が数多く掲載されている。複数の写本が伝わるが、本論では原則として国文学研究資料館蔵の写本を参照した⁽¹⁾。

(2) 作者・貴田元親について

作者の貴田元親(?~1689)は、江戸時代前期に活躍した軍学者である。江戸で北条氏長(小田原北条氏の一族、北条綱成の子孫)から甲州流軍学を学び、同門であった山鹿素行の教えも受けたという。弘前藩4代藩主の津軽信政は素行の兵学に傾倒し、素行に代わる人物として元親を招こうとした。元親はこれを辞退したようだが、後に息子の親邦が仕え、その子孫は幕末まで存続した。弘前藩に伝わった文書群の中にはこの経緯に関する記述があり、国文学研究資料館蔵の『城築規範』も、元は弘前藩に伝わったものである。

(3) 成立の契機と目的

『城築規範』には、貴田元親による前文がある。ここには本史料を作成したきっかけや、その目的が述べられている。史料の性格を考える上で重要であるため、適宜意識しながらその要旨を紹介する。

まず、17世紀後半当時の古城を取り巻く状況として「一国一城令により、昔の城跡は耕されたり草が生えたりして、残っているものは十の一つである」と述べている。その上で、城の絵図を何

のために必要とするのか、絵図を集めて書物を編纂するのはなぜかという2つの問いについて、それぞれ5点、3点の理由を挙げて説明している。

前者に対する5つの答えは築城に関して軍学が追及した対象に対応していると思われ、①城の縄張の形を知ること、②時代による変化を知ること、③地形のあり方を知ること、④攻めと守りの方法を知ること、⑤ある国、ある場所に要害の地があることを知ることとしている。

後者に対しては、①編纂すればそれを参照しやすくなり、読みやすくなる、②それによって議論が日々熟していく、③もし何もしなければ、必ずなくなってしまうだろうと心配している、からであると答えている。そのため、貴田元親は長年選定を進め、書写した城絵図を集めて『城築規範』を編纂したと述べている。「書写した城絵図」とあるため、本史料に掲載された城絵図は貴田元親が自ら調査して作成したものではなく、他者の成果を引用、参照したものであることがわかる。これらの記述からは、当時すでに全国各地で城絵図は描かれていたが、それらを集めて比較検討することが可能なレベルの城絵図集は存在していなかった状況と推定できる。

なお、矢守一彦は、山鹿素行と貴田元親の交流を踏まえて「『城築規範』の素材の多くは素行に発しているであろう」と推測している（矢守1981）。

2. 内容の分析

史料の概要や成立の背景を確認したところで、掲載されている菅谷城⁽²⁾の絵図について具体的な内容の分析を行っていく。

(1) 菅谷城絵図について（図1）

①全体の描写

題名は「武州菅谷城」と表記されており、図の左下に記された城郭の来歴等には「昔日上杉管領居城之由」とある。ここからは、鎌倉時代の畠山重忠の館跡ではなく、あくまでも戦国時代の城郭としての面を評価していることがわかる。

遺構の描写に目を向けると、土塁や堀の屈曲が詳細に表現されていることがわかる。特に、西ノ郭や三ノ郭、二ノ郭の土塁の屏風折れには、かなり強い意識を向けて描いている。ここからは、築城技術をはじめとした軍学の知識に長じた者が現地を丹念に観察し、絵図の作成に関わったことがうかがえる。現況との比較は後ほど行うことにして、先に絵図内に記された書き込みの内容を確認していきたい。

②書き込み

各郭には、「二町ホド」などといった書き込みがみられる。原則としておおむね南北方向と東西方向それぞれが記されており、郭の規模を示す。ただし、縮尺はかなりアバウトであり、例えば三ノ郭の「二町ホド」と、二ノ郭の「一町ホド」の絵図上での長さは、2対1の比率から大きく外れている。後述するように数値の計測は正確に行われているものの、作図にあたっては意識されていなかったことがわかる。

また、三ノ郭から二ノ郭に向かう馬出の北側には「松アリ」と書かれている。これ以外には同様の書き込みはなく、この位置に松が生えていることに対して、何らかの理由で注意が向けられたことがうかがえる。例えば、松が三ノ郭から二ノ郭虎口に向けての視界を遮ることへの軍事的な評価が第一に思い浮かぶ。

城郭と樹木の関連としては、永禄8年（1565）の年代が記される『築城記』に「一 城の外に木を植えまじき也。土あの内の方に木を植て可然也。」との記述がある。このほか、近世の軍学書にも、

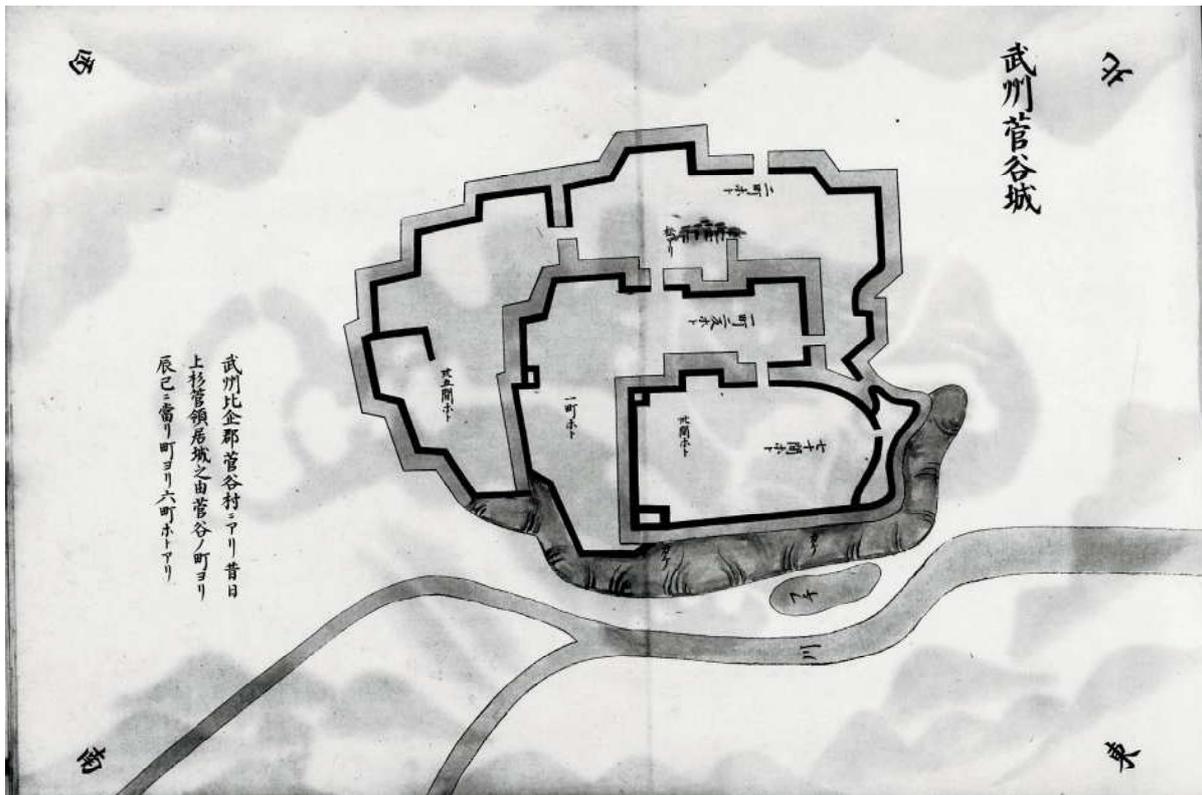


図1 菅谷城絵図（『城築規範』収録）

城内の樹木に関する項目が設けられている（北条氏長『士鑑用法』など）。これらの記載に対して、城郭内の樹木は繁栄のシンボルとして認識されていた面を持っていたと考える見解があり（中澤1999）、こうした視点から、城郭内に松が生えていることの象徴的な意義に目を向けた可能性も考えられる。

③現状の測量図との対比

図2は、②で見た郭の規模を示す数値をメートルに換算し、菅谷館跡の現況測量図に適宜当てはめたものである。また、絵図に描かれた土塁や堀などの表現と、現在残る遺構の相違点も示した。

換算した数値は、やや恣意的ではあるが、おおむね現状の郭の規模と一致する場所を見出せる。二ノ郭東側に見える東西方向の「一町二反ホド」は、二ノ郭全体の東西の長さには及ばないが、土塁の延長線（図上に点線で示した地点）を基準に郭を二分したと考えれば、東側の東西の長さとも一致する。西ノ郭の「卅五間ホド」は東西、南北いずれともうまく合致しないが、郭南側の傾斜のどこを端と捉えたかによって、多少数値が前後した可能性も考えられる。

次に、土塁や堀などの表現と現状の相違を確認する。まず、大きな差異としては、西ノ郭と二ノ郭の位置関係と、南郭の欠落が挙げられる。絵図に描かれた西ノ郭は、実際よりも南側まで伸びるように表現されており、南郭が描かれていないことと合わせ、絵図と測量図を比較した際に大きく違う印象を与えている。縮尺を考慮していないとはいえ、他の郭同士との位置関係にはさほど違和感がないことを踏まえると、現地調査時にこの地点周辺で何らかのミスをしていると推定できる。その手掛かりとなるのが、南郭西側から南側に回り込むように位置する土塁である。絵図の二ノ郭西側を巡る土塁を見ると、南端で東に向けて回り込むように描写されている。現在はそこに土塁は存在せず、むしろ南郭西側土塁の現状と一致している。ここからは、二ノ郭と南郭の位置関係に関する現地での認識や記録に混乱が生じ、南郭の存在が欠落してしまった結果、南郭の土塁だけが二ノ郭のものとして描かれた可能性が考えられる。二ノ郭の南端にかつては土塁があったと推定するこ



図2 現況測量図と絵図表現の比較

とも可能だが、いずれにしてもこの周辺は現地での調査記録が不十分であったとは言えるだろう。また、本郭から南側を見下ろした際、堀と土塁の存在によって南郭が全く見えないことも、南郭に関する誤認を生じさせる要因の一つとして推定できる。加えて、本郭南側の堀や土塁の表現に現状との差異があることは、本郭から南側には実際に立ち入った調査を行わなかった可能性も考えられる。

目立った差異としては、三ノ郭から二ノ郭へ向かう馬出の土塁と堀の一部、正坊門南側土塁と葺土塁が描写されていない点もある。現在見られるこれらの遺構が全て後世の改変であるとは考えにくい。見落としあるいは描き漏らしと考えられるだろう。

また、既に指摘されていることではあるが、「大手門」と称されている西ノ郭西面の土塁の切れ

目が表現されていない点も異なる。これは享和2年（1802）頃に福島東雄によって編纂された『武蔵志』に至るまで同様であり、江戸時代の絵図に共通した特徴である。『武蔵志』掲載の絵図は既存の絵図に基づいているが、書き込みから作成にあたって現地調査を実施して修正を加えたことがうかがえ、「大手門」の存在については今後も検討が必要な課題の一つである。

この他、搦手門の位置も挙げられる。この周辺の土塁の折れの表現は現状と比較して正確性を欠き、絵図と現状の対応関係の判断が難しいところもあるが、土塁が大きく張り出す部分を基準にすると、現状の土塁の切れ目からやや東側にあるようにも解釈できる。虎口の防御性の観点からは、現状の搦手門よりむしろ自然な位置である。搦手門周辺の遺構を理解する上で重要であるため、後ほど改めて取り上げたい。

上記を総括すると、郭の規模に関する注記は、先述した土塁や堀の形状への観察眼の鋭さと合わせ、絵図の作成に先立って詳細な現地調査が行われたことを示している。しかし、誤りや不十分な点の存在からは、現地の状況と細かく照合しながら下図を作成していったのではなく、現地では数値の記録や略図程度の図化を行い、別の場所で完成させた様子が推測できる。とは言え、かなり高い精度で城郭の遺構を解釈し、表現していることは確かであり、17世紀代の菅谷城の状況をかなり詳細に伝えている絵図であると評価できる。

(2) 他の城郭の場合

菅谷城は平城であるため高低差が小さく、広大ではあるが縄張りはさほど複雑ではない。こうした理由から距離の計測や全体構造の把握が比較的容易であったことで、実態に近い絵図を作成できたと考えられる。それでは、郭間の高低差がある山城の場合ほどの程度実態を反映した絵図になっているのだろうか。以下では、現在の埼玉県内に所在する城郭である、天神山城と日尾城の絵図を取り上げて検討していく。

① 天神山城（図3・図4）

天神山城は、長瀬町岩田の荒川右岸の丘陵上に所在し、藤田氏の居城として知られている。永禄4年（1561）の「秩父一乱」の際には小田原北条氏に敵対したが、次に触れる日尾城などとともに攻略されたとの記録が残る。地域で大きな力を持った武士が本拠とした割には同時代の記録が少なく、これ以前、以降の利用状況についてはほとんど情報がない。

絵図と縄張図を比較すると、全体的に丸みを帯びた表現となっており、一見すると実態をあまり正確に捉えて描いていないように感じられる。しかし、最大の郭である二の郭を基準に位置関係を追っていくと、豎堀や東側斜面の「出郭」と呼ばれる郭群が描かれていない以外は、大まかな特徴を掴んでいる。また、郭内に記された距離も、現地の状況をおおむね正確に示していると言える。

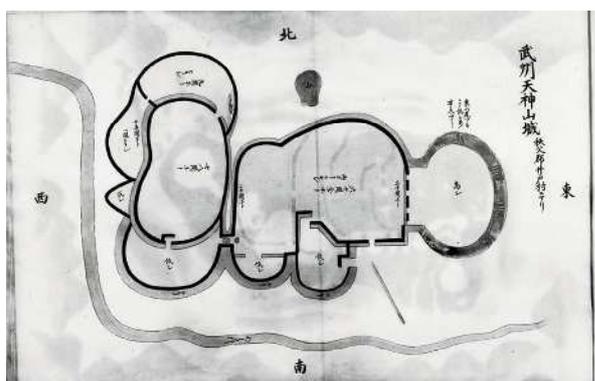


図3 天神山城絵図（『城築規範』収録）

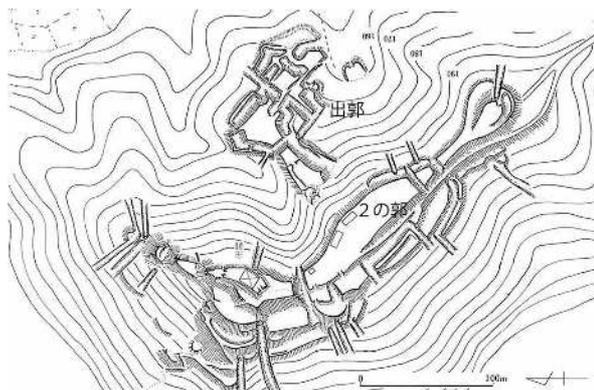


図4 天神山城縄張図（関口1987を一部改変）

② 日尾城 (図5)

日尾城は、小鹿野町飯田に所在し、牛首峠から続く尾根筋の先の丘陵頂部に位置する。元亀元年(1570)6月の「北条氏康書状写」には、「大瀧筋日尾之山口」からの武田勢の侵攻に関する内容が見え、小田原北条氏の上武国境に対する防衛拠点の一つとして整備されたと考えられる。その地理的な重要性もあってか、文献にたびたび名前を確認することができる。

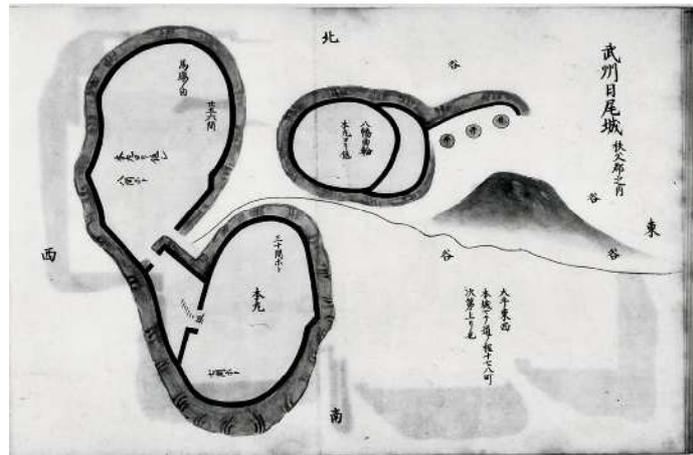


図5 日尾城絵図 (『城築規範』収録)

まず、「秩父一乱」の際に、北条方の南図書助によって攻略されたとあり、戦後処理も同氏が行っていた記録がある。また、天正13年(1585)の法養寺薬師堂(小鹿野町)の十二神将胎内銘には「日尾城主旦那 諏訪部遠江守」とあり、地誌類に伝承が見える、諏訪部氏が城主であったことがわかる。いずれの段階においても、地元の有力武士であった出浦氏の尽力があったことがうかがえる。

既存の刊行物に掲載された図^③に加え、かつて筆者が現地を踏査した際の記録も参考に考えると、絵図の表現はかなり単純化、模式化されており、現地の状況を正確に描いているとは言い難い。現在残る郭との対応関係を追うのは難しいが、郭内に記載された数値は、その規模を実際に計測したものであると思われる。図の精度、作図の手法とも、おおむね天神山城と同程度であると言えるだろう。

上記の検討から、2城とも菅谷城と同じく現地を踏査し、郭の規模を適宜計測しながら図を作成していったと考えられるが、現地で細かくチェックして図を完成させていったとは考えにくいとも言える。郭の縦と横の長さだけを測り、その平面形や外郭線を正確に描写することにこだわらず図化していったために、円形に近い曖昧な表現にならざるを得なかったのであろう。その点では、菅谷城が比較的正確な形を表現しているのは、郭が土塁で囲まれており、方形に近い形をしていることが大きいと言える。

つまり、測量図のような正確な図面を作り上げることより、地表面で観察できる情報は注記で補足し、全体としては模式的、復元的な図であっても、軍事的に見て重要な点は詳細に表現することを最優先した図とも言い換えられる。やや語弊があるが、正確な測量図ではなく「模式的、復元的」な側面を持つ図であるという意味では、現在の縄張図の考え方と近いものがあるとも言えるかもしれない^④。しかし、図化の手法の面では、現在一般的に作成されている縄張図が、郭の外郭線の要所を計測し、それを繋いで平面形を描いていくのとは全く異なっている。

本論でこの2城を取り上げたのには、もう一つの理由がある。上記でそれぞれの来歴を紹介したように、これらは必ずしも地域における拠点であり続けた城郭ではなく、全国的に著名な人物にまつわる来歴を持つものでもない。この点は、やや程度は違えど戦国時代の菅谷城についても同様のことが言えるだろう。

それならば、なぜ貴田元親はこれらの城郭を取り上げたのだろうか。『城築規範』に掲載された絵図の特徴や各要素の傾向の分析を通じて、この点についても推測したい。

(3) 掲載された城郭の地域性や表現方法に見る差異

ここからは、比較対象を全国に広げて検討を進める。絵図の枚数は先述のとおり72枚であるが、



図6 『城築規範』収録城郭の国別分布

「戸石古城」は構図が異なる絵図2枚が収録されており、「榛澤古城」は詳細不明であるが深谷城とされていることから、重複を除くと70箇所となる。一覧とそれぞれの詳細は、文末に表で示した。

① 地域性

城郭の所在地は、出羽から肥前に至るまで全国各地に及ぶ。しかし、その国別の分布を見てみると、明らかな偏りがあることがわかる(図6)。『城築規範』採録の城郭に偏りがあることはこれまでも指摘されているが、その理由は詳細には検討されていない。

最も多いのは武蔵の15箇所、全体の21.4%を占める。続いて河内が5箇所(7.1%)、三河、駿河、相模がそれぞれ4箇所(5.7%)と続く。現在の関東地方(1都6県)から離れるほど少ない傾向が見られ、関東地方だけで27箇所(38.6%)となっている。

武蔵の中でも、現在の埼玉県内に所在する城郭が12箇所を占める。先に見た日尾城、天神山城のほかには、岩付城、松山城、羽生城、深谷城などといった地域の拠点となった城郭だけでなく、浅羽城のように現在では全くその詳細が不明なものも含まれている。一方で、小田原北条氏の一族である北条氏邦が拠点とした城郭として、岩付城、松山城と同じかそれ以上の重要な位置づけであったと言える、鉢形城が抜けている点を指摘しておきたい。武蔵国内に限って見れば、明確に一貫した基準はないように思える⁵⁾。

一方、西国の城郭には選定の基準がある程度うかがえる。例えば、河内では赤坂城、千早城などが掲載されており、ほかに山城の伏見城、聚楽第、大和の多門城、信貴山城、肥前の原城など、著名な戦いの舞台、あるいは軍記物語に登場する城郭が主となっている。関東地方とは異なる傾向を示し、手元に所有していた絵図を、関東地方との比較用に掲載したようにも感じられる。

② 書き込み、表現のばらつき

次に、各図面に記された注記から、郭や土塁等の遺構の規模と、地形に関する記載の有無をまとめた。遺構の規模は48箇所(68.6%)、地形に関する記載は33箇所(47.1%)に見られる。いずれも記されるものは27箇所(38.6%)、いずれも記されないものは16箇所(22.9%)である。これらの項目は、絵図を作成するにあたっての、現地調査の有無やその精度をある程度反映していると考えられる。各数値からは、大半の城郭において程度は異なるが遺構規模の計測が行われており、地形に関しても高い関心が払われていることがうかがえる。しかし、絵図の作成にあたってはこれらの情報の記載は必須とは認識されておらず、いずれも記されないものの存在からは、城絵図を用いた縄張の検討においては、平面形が描かれていれば最低限の用をなしていたものと推測できる。

また、中にはほかの絵図と異なる特徴的な表現をしているものも確認できる。例えば、山中城の場合、最も特徴的な遺構である障子堀に関する描写が全くなく、城内の建物と思われる表現のほか、城を囲むように人名が書かれているのみである。これは、小田原合戦の緒戦としての歴史的位置を示す目的で作成されたためであると推測される。ほかに、「三石古城」では周辺の道や村を広い範囲にわたって描き、「末森古城」では国絵図風の表現がされるなど、一般的な城絵図とは異なるものも混在する。城郭の構造そのものより、それを取り巻く地理的環境や、歴史的な位置づけを重視したケースと考えられる。

また、武蔵所在の城郭では、岩付城の絵図に郭の規模も地形も一切書き込まれていない点が他と比べて異質である。これは、岩付城が当時も現役の城郭であったことにより、詳細を伏せる必要があったためだろうか。それでも掲載する判断をした理由はうかがい知れないが、岩付城を攻めた豊臣方が、「名城」と評価する文書が残ることと関係するかもしれない(竹井2022)。

(4) 小結

上記の分析を総合すると、『城築規範』に掲載されている絵図には、所在する地域、描画方法など、大きな偏り、あるいはばらつきが存在することが指摘できる。特に地域については関東地方周辺に極端に集中し、後の時代に編纂された『諸国古城之図』などのように、全国的に網羅した絵図集を作成しようとした意識はうかがえない。この理由を考える上では、『城築規範』の編纂が、おそらく先駆的な取り組みであり、参考にする前例がなかったことは無視できない。そのため、そこには作者である貴田元親、あるいはその師らをはじめとした関係者の、学問的なバックボーンや関心な

どが如実に反映されている可能性を考える必要があるだろう。他の絵図集の例ではあるが、『諸国古城之図』の編纂にあたっては、広島藩が甲州流軍学を採用して軍政改革を行った影響が大きいと指摘されており（広島城 2014）、そこには甲州流軍学の創始者とも言える小幡景憲の子孫が深く関わっている。

冒頭に触れたように、貴田元親は北条氏長の教えを受けており、その師である小幡景憲にまで学問的な源流を求めることができる。北条氏長は小田原北条氏の一族の流れを汲み、小幡景憲は甲斐武田氏の家臣であった人物である。短絡的ではあるが、『城築規範』に小田原北条氏や甲斐武田氏の支配した地域に所在する城郭が多く掲載されているのは、これと無関係ではないだろう。

天神山城や日尾城は、北条氏康の息子である氏邦が支配した鉢形領に所在する城郭であり、特に天神山城は氏邦の義父、藤田康邦が本拠とした城郭である。それならば、なぜ鉢形城がないのかという問いに答えは出せないが、こうした歴史的背景から、全国的には決して著名ではないのにも関わらず研究の関心が向き、絵図が作成されたと考えておきたい。

まとめ

『城築規範』に掲載された絵図は、ある程度の粗密があるものの現地を詳細に観察した上で作成されたものと考えられ、現代の測量図とは異なる表現方法ではあるが、個々の絵図の完成度は全体的に高いことを確認した。また、前文の内容を信じるのなら城郭の絵図集としては先駆的なものであり、後世の同種の史料と比べて、早い時期に作成された絵図が掲載されている可能性が高い。ただし、前文の記述からは貴田元親が自ら作成したものではなく、原本となった絵図が存在していたこともうかがえる。城絵図の研究においては、全国的に網羅されており、書籍によって容易に内容を確認できることから『諸国古城之図』が取り上げられることが多いが、菅谷城に限らず『城築規範』に掲載されている城郭については、本史料をベースにする必要があるだろう。

現在のところ、戦国時代の菅谷城の実態を解明するための材料は限られている。そうした点では、戦国期の様子を検討する上での基礎資料の一つであり、その価値が非常に高いことを改めて確認した。

最後に、絵図と現状の比較作業や日々の観察を通じて、遺構の解釈について考えたことを提示し、結びとする。既に指摘されている、あるいは内々に議論の俎上に載っている点もあるかもしれないが、あえて明文化しておくことに意味があると考えたい。

① 搦手門の外側について

搦手門の外側には現在国道 254 号が通っており、浅い谷地形である。三ノ郭外堀とこの谷の間には、「二重土塁」と表現される高まりがある。外堀は搦手門東側でクランクし、「二重土塁」は略三角形の平面形を持つ広い空間になる。この時、三ノ郭の土塁上からは横矢が掛かっており、北側の浅い谷を越える橋の存在を仮定すれば、この空間を馬出状の郭として理解することができるかもしれない。

先に、絵図に示された土塁の開口部⁽⁶⁾の位置を「虎口の防御性の観点からは、現状の搦手門よりむしろ自然」とした。これは、土塁を屈曲させて張り出し部を設けながらも、搦手門に対しては横矢が掛からずその意図が不明であるためだが、ここに郭があったとすればその疑問は解決する。

② 搦手門の「食い違い虎口」について

搦手門の土塁の開口部は、当館の解説では「食い違い虎口」としている。しかし、現地を改めて観察すると、図 2 のとおり外堀は完全に食い違っているが、土塁はほとんどずれておらず、一般的にイメージされる食い違い虎口とは異なるように感じた。土塁が完全に食い違っていなくても、堀

が食い違っていれば「食い違い虎口」と解釈してよいのだろうか。解釈の是非も含め、より適切な表現があればぜひご教示いただきたい点である。

③ 正拈門周辺の変遷について

正拈門周辺では発掘調査が実施されており、南北2つの虎口がいずれも戦国時代に設けられていたことが判明した。西ノ郭に目を向けると、大手門の位置が絵図にあるとおりに本来開口していなかったとすると、外部へのルートは三ノ郭と西ノ郭を隔てる堀の北端しか残っておらず、行き止まりとなる西ノ郭の位置づけが非常に不可解となる。この点において、大手門の開口の有無が改めて注目される⁽⁷⁾。城郭の構造全体から見た正拈門の位置づけや西ノ郭の整備時期など、この周辺の遺構の変遷を検討する上では、大きな課題が残っている。

以上、思いつくままに気づいた点を挙げた。絵図の検討結果は先学の成果を超えるものではなく、上記の所見も含め、明確な根拠をもって新たな見解を述べることはできなかった。はなはだ雑駁な内容ではあるが、菅谷館跡を考えていくにあたり、何らかのきっかけとなるものが提示できていれば幸いである。今後も、菅谷館跡を理解するために、周辺を中心とした城館跡を検討する機会を作りたい。

註

- (1) 本文中で提示した『城築規範』に収録されている絵図は、国文学研究資料館のデータベースで公開されている画像を使用した。
- (2) 以下、『城築規範』の記載に従い、「菅谷城」と表記する。また、郭や虎口等の名称は当館での呼称を使用する。
- (3) 例えば、梅沢太久夫 2018『埼玉の城-127 城の歴史と縄張』がある。
- (4) 縄張図の作成における基本的な手法や考え方は、千田嘉博ほか1993『城館調査ハンドブック』などを参照されたい。余談となるが、縄張図に対しては復元的、模式的な表現がたびたびあり、作図者による表現の際が大ききことから、図の客観性や正確性が担保されていないという趣旨の批判がなされることがある。筆者もかつてはそう感じていたが、城館調査で縄張図を作成するうちに、縄張図はあくまで作図者個人の遺構への解釈を提示するための図であり、客観的かつ正確であることを求められる測量図とは本質的な性格が全く異なると考えるようになった。ここでは、縄張図に対して正確な測量図でないから価値が低いと評価するような意図は込めていない。
- (5) 菅谷城の立地は、北条氏長が記した『兵法雌鑑』などに示される「繁昌の地形」、すなわち「北たかくして南低。きた南へ長、東西南に流水あり。」をほぼ満たしていると評価できる。
菅谷城の場合、この点が軍学者に注目され、選定された可能性も指摘できる。
- (6) この地点は、現状では周囲より少し土塁が低くなっている。土塁の高さは対岸にあたる郭状の空間とほぼ同じである点は示唆的であるが、ここに橋が架かっていたと考えるには三ノ郭側に渡った後の土塁の高低差が課題である。しばしば言及される、本郭出榭形土塁対岸の高まりから、本郭に向けて橋が架かっていたという説にも同様のことが言える。
- (7) 梅沢太久夫氏のご教示によれば、大手門周辺の遺構は比企型虎口として解釈できるという。現地の詳細な観察を行い、改めて考える必要がある視点である。

参考文献

- 石岡久夫編 1967『日本兵法全集3 北条流兵法』人物往来社
- 小野義信 1984「比企地方の中世城郭 その3 -国指定史跡 菅谷館跡の構造について-」『研究紀要』第6号、埼玉県立歴史資料館
- 加藤光男 2021「菅谷館・菅谷城理解のために—文献史学の視点からの再検討—」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第14号、埼玉県立史跡の博物館
- 関口和也 1987「天神山城」『図説中世城郭辞典1 北海道 東北 関東』新人物往来社
- 竹井英文 2022『杉山城問題と戦国期東国城郭』戎光祥出版

谷口眞子 2014 「近世前期の兵学とは一文武・治乱をめぐる認識」『書物・出版と社会変容』17、「書物・出版と社会変容」研究会

中澤克昭 1999 『中世の武力と城館』吉川弘文館

公益財団法人広島市文化財団広島城 2014 『浅野文庫諸国古城之図の世界』

山下孝司 2014 『戦国期の城と地域』岩田書院

矢守一彦 1981 『浅野文庫蔵諸国古城之図』新人物往来社

嵐山史跡の博物館 2022 『改訂版 国指定史跡比企城館跡群 菅谷館跡』嵐山史跡の博物館ガイドブック 2

表 1 『城築規範』収録城郭一覧表

番号	名称	所在地	郭の規模	高低差等	関東	武蔵国	埼玉県	比定地	備考
1	大坂古城	摂津	×	○					
2	深谷古城	武蔵	○	×	○	○	○	深谷城	
3	伏見古城	山城	○	×					
4	日尾古城	武蔵	○	○	○	○	○	日尾城	「秩父郡之内」など注記
5	江尻古城	駿河	○	○					
6	古市古城	河内	×	×					
7	大岡古城	三河	○	○					「此曲輪高シ」など注記
8	野田古城	三河	○	○					土塁の高さ詳細に記入
9	小山古城	遠江	×	○					
10	瀧山古城	武蔵	○	×	○	○		滝山城	
11	多門古城	大和	○	○					
12	鞠子古城	駿河	○	○					「本城ヨリ低シ」など注記
13	岩付古城	武蔵	×	×	○	○	○	岩付城	
14	捲嶋古城	信濃	○	○					
15	高屋古城	河内	○	○					「平地ヨリ少高」など注記
16	沓懸古城	三河	×	×					
17	足柄古城	伊豆	○	○					
18	望月古城	信濃	○	○					
19	東根古城	出羽	×	○					
20	騎西古城	武蔵	○	○	○	○	○	騎西城	地形は沼の規模について
21	深澤古城	相模	○	○	○				
22	本郷古城	武蔵	○	○	○	○	○	滝の城	
23	信貴古城	大和	○	○					
24	岩殿古城	甲斐	○	×					
25	三石古城	備前	○	○					周辺の道や村も広範囲に描く
26	埼玉古城	武蔵	○	×	○	○	○	羽生城	
27	作手古城	三河	○	○					
28	榛澤古城	武蔵	(○)	(×)	(○)	(○)	(○)	深谷城カ	
29	名嶋古城	筑前	×	○					石垣の高さについて記述
30	鳴海古城	尾張	○	×					
31	箕輪古城	上野	×	○	○				
32	山中古城	伊豆	×	×					軍勢配置が書き込まれる
33	二見古城	大和	○	○					

番号	名称	所在地	郭の規模	高低差等	関東	武蔵国	埼玉県	比定地	備考
34	浮嶋古城	常陸	×	○	○				
35	菅谷古城	武蔵	○	×	○	○	○	菅谷館跡	
36	赤坂古城	河内	○	○					
37	末森古城	能登	×	×					国絵図風
38	矢尾古城	河内	×	×					
39	鹿沼古城	下野	○	×	○				
40	戸石古城	信濃	○	×					構図が異なる2種を掲載
41	戸石古城								
42	片倉古城	武蔵	○	×	○	○		片倉城	
43	筑井古城	相模	○	×	○				
44	岡崎古城	相模	○	○	○				
45	松山古城	武蔵	○	○	○	○	○	松山城	数字で郭同士の高低差を表現カ
46	高岡古城	越中	○	×					
47	浅羽古城	武蔵	○	×	○	○	○	浅羽城	
48	聚楽古城	山城	×	×					
49	志太古城	陸奥	×	×	○				「陸奥」は「常陸」の誤
50	諏訪原城	遠江	○	×					
51	上俊古城	上総	○	○	○				「俊」は「後」の誤
52	興国寺城	駿河	○	○					
53	岡山陣城	摂津	×	×					
54	栗橋古城	上野	○	×	○				「上野」は「下総」の誤
55	茶臼山城	摂津	×	×					
56	山條古城	越後	○	×					
57	禅徳寺城	駿河	○	×					
58	真崎古城	伊予	○	○					
59	難波田城	武蔵	○	○	○	○	○	難波田城	川までの距離を記述
60	延沢古城	出羽	×	×					
61	天神山城	武蔵	○	○	○	○	○	天神山城	「出郭」は描かれない
62	千劔破城	河内	×	×					
63	天草古城	肥前	×	×					
64	今井陣城	相模	○	×	○				
65	八王子城	武蔵	○	×	○	○		八王子城	
66	葦山古城	伊豆	○	○					山上の郭は描かれない
67	高名山城	播磨	×	×					高「倉」の誤りカ
68	平井古城	上野	×	×	○				
69	新府中城	甲斐	○	×					
70	八幡山城	武蔵	○	×	○	○	○	雉岡城	「江戸ヨリ廿一里」注記
71	古府中城	甲斐	○	○					
72	江戸崎城	下総	×	×	○				「下総」は「常陸」の誤
			48	33	27	15	12		